S3-5

日本薬局方に収載される生薬基原種の学名の見直しに関する問題

Issues surrounding the revision of scientific names listing on The Japanese Pharmacopoeia

○近藤　健児[1]（[1]株式会社ツムラ　生薬研究部）

生物の学名は分類学的研究が進むにつれて変化する．日本薬局方は公定書であり生薬基原種の学名の変更による市場の一時的混乱も考えると，分類学的研究に対応したﾘｱﾙﾀｲﾑでの学名見直しはなかなか進まないのが現状である．ただし，これを放置してしまうと世間的にあまり使用されていない学名が日本薬局方だけで使用され，これが市場や教育の場へﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸされてしまうことになる．例えばﾌﾞｸﾘｮｳは日本薬局方ではﾏﾂﾎﾄﾞ *Poria cocos* と記載されているが現在，ﾏﾂﾎﾄﾞの学名は一般的に *Wolfiporia cocos* が採用されている．またｻｲｼﾝは日本では *Asiasarum* 属が採用されているが，世界的には *Asarum* 属が一般的である．ただし，分類学的研究の結果として付けられた新しい学名が全て日本薬局方に採用されるわけではない．公定書である日本薬局方での学名の採用には，その学名の「一般性」が重要なﾎﾟｲﾝﾄとなる．そこで本発表では，日本薬局方における学名見直しの目安となる「学名の一般性」とは何を基準として考えるべきかについて議論したい．

また，新たな研究により学名が変更されるべき生薬も出てきた．例えばｾﾝｷｭｳは *Cnidium officinale* が採用されているが，遺伝子情報から考察すると，ｾﾝｷｭｳは中国で採用される *Ligusticum* 属に分類するのが妥当と考えられる．またｿｳｼﾞｭﾂは *Atractylodes lancea* と *A. chinensis* が基原種として規定されているが，これらの雑種が存在することも判明した．このような研究成果をどのように日本薬局方へ反映させるべきかも合わせて考察する．